



北海道の農村で進む国際化

北海道の農村に通年・季節滞在する外国人の数を正確に把握した統計はないが、北海道の魅力にひかれ、定住したり、短・長期滞在で訪れる外国人は相当な数にのぼることが推定される。例えば、後志のニセコエリアにある倶知安町へのオーストラリア人スキー客の入り込み数は約8千人で平均8・7泊。最近ではアメリカ、カナダ、東アジアからのスキーヤーも増加している。この観光客を受け入れる外国人も急増しているが、その中でオーストラリア人だけでも既に50人を超えている。そして、これらの外国人が、北海道の農村社会に与える影響は極めて大きい。

犬たちと暮らす大工のダニーさん

ダニー(ダニエル・リチャード・ニセコ)さん60歳が夫人の村上京子さん44歳と約20匹の犬たちと暮らすのは、旭川に隣接する鷹栖町(人口8千人)の純農村。今年の冬も、ご夫妻は旭川の医療関係者などが組織する、大雪もてなし隊のトリアル・ツアードで、脊椎を損傷した人たちを対象に、犬そり体験を実施した。ダニーさんが手の不自由な人でも操作できるよつと工夫した犬そりを使って、自分たちで犬そりを操り雪原を駆け巡る喜びは想像以上のもので、走り終わった後には皆別人のように光り輝いていた。それはダニーさんにとってもエキサイティングな体験だった。ダニーさんはポーランド系アメリカ人としてシカゴで生まれ、その後カナダに移住。木造住宅や木工などの仕事をなわいとしてきた。1995年長野オリンピックのため建設需要が増した長野に、北米型ツープライヤーのインストラクターとして来

日。その後一時帰国するが、札幌にカナディアン住宅を建てるプロジェクトに参加するため再来日。そのインテリアを担当していた村上京子さんと巡り会った。建築設計士の村上さんは、東京都吉祥寺生まれで、24歳の春に北海道にやってきました。2人は11年前に鷹栖町に居を構えた。場所選びはまったくの偶然だったが、そのときに生後30日のシベリアン・ハスキーを友人から押し付けられるままに飼いはじめたのが、現在の20頭につながる。犬そりとの出会いもこのころである。マッシュ(犬そり使い)として知られる大向弘晃さんが近所に暮らしていた。犬たちの訓練を頼むつもりが、二人とも犬そりの魅力に取り付けられ、ミイラ取りがミイラになった。思うようにいかないで転んでアイスハーンの上を犬に引きずられもしたが犬ぞりは面白かった。スノー・キールのようなスピード感。その冬は残雪を探してまで存分に犬ぞりを楽しんだ。長い北海道の冬を面白く過ごすためには何かが必要なのだ。ダニーさんはそり作りで夢中になり、村上さんはレースにも出始めた。ダニーさんにとつて犬は、カナダでは狩を手伝ってくれたし、友人のようなものだ。という。犬たちもつながれているだけではつまらない。そりは犬にとつても遊びなのだ。冬が近づき雪が降り始めると、自分らの出番が近いことをみんな知って、目の輝きが違ってくる。雪が降るとほえて喜び、その準備をすともう大騒ぎ。まるで犬を中心に人の営みが構成されているようだ。

日本文化について、ダニーさんは相撲を例に、「かたくなに伝統的様式を守りつつ外国人を受け入れ、その外国人たちを認め評価している。日本に必要なことはこのような姿勢だ。外国人のヒールが育った結果、相撲の海外での視聴率・人気

は非常に高い。日本文化の良さを広める絶好の仕組みを作り上げている。それにBS放送での英語の解説が特に面白い」といつ。MLBで活躍する日本人選手と同じ構図だ。

ダニーさんはカナダのクワッドラアイランドの大自然の中で生きてきたが、村上さんはダニーさんと出会う初めて田舎暮らしを体験した。自然も動物も大好き、それに加えて田舎には何よりスペースがあるの。スーパーマーケットへの買い物に10分、旭川まで30分という利便性も欠かさない条件の一つ。お二人は、純農村の姿を残したままの都市的便宜を享受できる鷹栖町の生活を存分に楽しんでいる。

ニセコでレストランを経営する

空間デザイナーのシヨウヤさん

シヨウヤ・P・T・グリッグさん(38歳)が来日したのは14年前の1994年。シヨウヤさんはイギリス・ヨークシャーで生まれ、13歳のときに両親とともに西オーストラリア・パースに移り住んだ。大学ではアートデザインを専攻した。

大学で映像を学んでいたころ、日本の制作会社からの仕事をフリーランスとして請けた。英語でか「コミュニケーションできない。日本語を学ばうと思つたが、言葉は学校ではなく実践で日本に行つて学ぶ方が、土地や地域との相性などが見えてくる。住民とのコミュニケーションもとりやすい。日本行きを決意したシヨウヤさんは図書館に行つて文献をあさり始めるが、そこで偶然一冊の日本の国立公園の本に出会う。幼少期を過ごしたイギリスのヨークシャーはさほど広いところではないが、北海道で言えば美瑛のように丘があり、農地が広がっていた。緑や四季も恋しかったし、北の気候が育む山や川の風景も好きだったが、西オーストラリアは

暑くて乾燥していて、それとは異なっていた。結局東京よりも北海道に行つてみたくなつた。マウンテンバイクを持って直接北海道へ、赴くままに走り出し、看板を見つけて目指した湖が支笏湖だった。言葉に出せない感動だった。そこで1週間滞在するが、夏休みだったこともあり、日本の大学生たちとも交流を持ち友人もできた。4月にかけて北海道をほとんど回った。たくさんの人に出会つて優しくていい感じの人たちばかりだった。日本の第一印象はとてもよかった。おそらくそれが東京だったら印象は異なっていたと思うと、と述懐する。

日本語はうまくなかったが、札幌では、DJの仕事をした。FM北海道の番組も持った。映像はムービーが専門だったが、写真の仕事もやった。竹田かな江さん(38歳)とは10年前に知り合い結婚。当時は、また海外に戻るのか、日本に会社を作つてがんばつてみようかと迷っていたが、都会のマンション暮らしは好きではなかった。まずは家を建てることにした。自然豊かな土地がよいが、生活を考えると孤立する田舎には住むことができない。都市とも交流できるフランスが必要だ。札幌は周りに自然も多く、郊外ならば田舎の生活ができて街にも近い。それに文化が恋しくなれば、東京にも行ける。香港や北京への直行便もある。結局、9年前に手稲山の山あいに土地が見つかり、アトリエ兼住宅を建てた。

2年前には、(株)空間を立ち上げ「ニセコ」のコンセプトを改装して、レストラン「バー 雪華」を出した。当初は札幌で始めようと思つてしたが、ニセコに国際観光の新しい動きが生まれてきたことから方針を転換した。店はイタリアンベースの料理、インテリアは和を意識した。出店については投資の意味もあるが、もう一つはメディアデザインやポス

ター製作などのデザインに加えて、未経験だった店舗デザインをしてみたらためた。北海道と本州は確かに異なる文化を持つが、ヒラフを訪れるオーストラリア人はほとんどが日本に初めて来る。多少は日本らしさも感じてもらえるよつと、大正時代のランプ傘や障子、欄間などを取り入れデザインした。新築するよりも古いものを改修し使いつけていくイギリス文化の影響がもしれない。魔虚が、デザインの力で復活するよつと、日本の人たちに見てほしい。口からコンセプトまでデザインし、その結果は十分満足いくものだった。

観光の現場から国際化へ

北海道には確かに自然にも人にもおろかさがある。ダニーさんはそれを「寛容さ」と表現した。その一方で、二人は日本独自の「生硬さ」をも感じてみえる。しかし、それも、相撲に見られるよつと柔軟性があれば長所にもなる。

語学研修や駅前留学だけでは国際化は進まない。観光など直接外国人と接する場で実際の経験をつむよつとが必要だ。そして異なる文化が衝突することにより、今まで見えてこなかったものが見え価値観も変わる。それが観光・ツーリズムをきっかけに北海道が一気に国際化する予兆なのかもしれない。

レポート

小俣 寛

(財)北海道地域総合振興機構主任研究員



レストラン&バー「雪華」



アトリエ兼自宅前のシヨウヤ夫妻



犬たちとの生活を楽しむダニー夫妻